

## 短歌表現（V）

### —コミュニケーション技術における学習効果の検討—

土 永 典 明

Tanka Practice (V) : Composing poems of daily life and nursing care

Noriaki Tsuchinaga

#### はじめに

短歌は詩形のうえからも、簡潔な圧縮された表現を求める。短歌の形式がわかれば、字数を数えながらでも短歌を作ることにはできる。しかし、ただ漫然と短歌を作ろうとしてもできるものではない。自分の見たこと、感じたことが短歌の内容なので、一首の短歌に表現してみたいというものがまずなければならない。

そして、人の作品はこれを読むとき、理屈で読まず胸で受け止めること。どんなに初心者作品でも、決して自分が優位に立って見ない。自分がないよさを見逃さない。整って淡い作品より、欠点があっても内容の濃い作品のほうがおもしろみがある。必死に作った作には上手下手を超えて心打つものがある。歌のよさは声調、調子にある場合が少なくない。語気の生きている作品を見落としてはならない。仮名遣いの誤り、語法の違い、日本語の成長から外れていることなどは極めて積極的に改める。丁寧にしっかり歌を作ることが大事である。

五七五七七に言葉をあてはめれば形のうえでは確かに短歌である。しかし、「よい歌」かどうか。そもそもどんな歌が「よい歌」か常に問い続けていることが大事である。日本語は工夫しだいでうまく五音七音にはまっている。五音も七音も奇数であることも重要視されている。奇数なので、一句の中の音数が半々にならない。それが味わいを生むというわけである。短歌のことをよく「みそひともじ」（三十一文字）と呼ぶが、実際には「文字」ではなくて、「音」のことである。あるいは、「みそひともじ」とは、和歌をすべてひらがなで書いていた頃の名残の呼び方ともいえる。全部ひらがなで書けば、三十一文字ちょうどか、それに近いものになる。現在の短歌は、漢字と仮名の交じった表記をするのが普通である。

短歌にはとても広い幅がある。まず一つには、句切れがある。句切れとは、短歌をいくつかの部分に分ける場所を設け、それぞれの部分でいろいろなことを述べながら、全体で別次元のことを詠いあげる、というものである。一首の中に句切れを入れることによって、短歌で表現されるものの幅はぐんと広がる。

## Ⅱ 短歌の作り方

### (1) あったことや思ったことをそのまま詠う

自分で見た事や思ったことを、そのまま読む人に伝わるようにまとめる。

### (2) 調子を考えてまとめる

最初は、自分の好きな短歌を選び、その調子をまねて作ってみる。手本をまねて作ることができるようになったら、今度は自分の力だけでまとめる練習をする。それには、今見ていることやすぐそこで行われていることを短歌にまとめるとよい。全体の調子がまとまれば、1音ぐらい字余りや字足らずになってもかまわない、気にせずのびのびとまとめる。

### (3) いつも注意深く見つめる

- ① 見たことのほかにもう一つ何かを見つけ出す
- ② 見たことのほかに感じたことをつけたしていく
- ③ 心に何かの気持ちがいっぱいあふれたときにそれをまとめる

### (4) 短歌ノートにまとめる

ノートを作り、どんどん書き込んでいく。思いついた一句だけでもノートに書きとめておく。そして、ゆっくりと考える時間があるとき、書きとめておいたものを手がかりに、そのときの気持ちをまとめていく。

### (5) 見せ合う

よい短歌を作るには、短歌を見せ合うことのできる仲間が必要である。5から6人の短歌のグループを作って、自分たちの作品を見せ合う会を開く。これを短歌会と言う。

### (6) 読み返して直す

上達するには、自分の作った短歌を読み返し、気に入らないところは何度も根気よく直すようにしなければならない。書いたときによくまとまったと思っても、何日かたってみると、気に入らないところはずいぶん出てくるものである。

## Ⅲ 推敲例

### 1. 靴ずれが気になりだして雪中を 歩き始める雪は氷に

\*前半と後半の関係がわかるように

### 2. 激論は車中で起こり春雪を楽しむゆとり無くしてけりな

\*口語の方がよい

### 3. 利用者に「さびしくなるね」と言われてこれまでのことが脳裏によぎる

\*を

### 4. 「大丈夫」あの日の自分に伝えたい小さな一歩で掴むは宝

\*内容は具体的な方がわかりやすい

### 5. 応えたい「笹川さん」と呼ぶ声であたたかい目で優しさあふれ

\*それぞれの主語がわかりにくい。誰がどうしたことに対してどう思った歌かを整理する

### 6. 休みでの学問だけで外に行く余裕がなくて退屈な日々

\*あとの内容につながるよう工夫する

7. 家帰りご飯を作る気力なくレトルトですむ今日の夕飯  
\*すます
8. 利用者さんいくら病気で辛くても笑った顔は世界で一番  
\*どれほど
9. 「お久しぶり」覚えてくれた職員さん前の実習話をしたことなかったのに  
\*7、7にする
10. 煩悩の夜は長くて我一人とても寝られず本を読むなり  
\*眠れず
11. 疲れ果て緊張取れた帰宅中開放感が体を廻る  
\*帰宅途中か帰宅後は
12. 初めての利用者さんとのかわりは楽しいけれど悔しい気持ち  
\*この気持ちに絞って作ってみるとよい
13. 家の中いつも聞こえる祖父母の声聞くと安心する  
\*上句と下句の関係がわかるようにする
14. 手招きでいつも私を呼ぶあなた夏に行くから待っててね  
\*擬音化するとよい
15. 姉ちゃんと毎回笑顔でハイタッチ私が介護を目指した理由  
\*「理由」をさりげなく入れる

#### Ⅳ 短歌でつづる学生の日常生活

##### 1) 介護福祉実習

高橋美和

- 違うよと真っ赤なほっぺ指差してこれは瘤だと微笑む利用者  
（講評）その利用者はいつも職員から、「ほっぺに飴が入ってるんですね」と言われて、「違うよ！」と笑いながら答えていた。

石井亮輔

- レクリエーション楽しんでくれてありがとう目が見えないの後で気づいたよ  
（講評）作者が実習でレクリエーションを計画実施した。そのレクに喜び楽しんだ利用者。後でその利用者が全盲であることを知った。

阿部慎也

- ドライヤー髪を乾かし「うまいね」と言われて照れる口元緩む  
（講評）利用者の髪を乾かしている時に、「上手だね」と褒められた作者。思わず口元が微笑んだ。

高橋佑佳

- 未熟さを身に染みていた五日間何にもできず手を握るだけ  
（講評）初めての实習で、利用者と話したいことがたくさんあった。しかし、ほとんど自分から話すことができなかった。ただ、利用者の隣に座り、笑顔で黙って手を握っていた。すると、その手

から利用者の温かさが伝わってきた。そのことが、嬉しくもあり、悔しくもあった作者である。

山形有紗子

○初めてで不安だらけの毎日がふと気がつけば職人の顔

（講評）初めての実習で不安だらけだったが、徐々に施設に馴染んで行く作者であった。

梅澤奈々

○一日目「学生さん」と呼ばれてた最後は名前を覚えてくれた

（講評）はじめは利用者から、「学生さん」とか「実習生さん」と呼ばれていたのが、最後の日には「梅澤さん」と呼ばれるようになった。そのことが嬉しかった作者である。

平奈雅子

○しわしわの大きい手のひら歴史みる長い時代を紡いできた手

（講評）男性利用者と手のサイズを比べあった作者。その手のひらに長い歴史を感じた。

丸山七彩

○「丸山です」何度も伝えた私の名不意に呼ばれて笑顔で駆け寄る

（講評）認知症の利用者に何度も名前を聞かれ、その都度、自己紹介をした作者。数日して、その利用者から不意に名前を呼ばれ、笑顔で駆け寄った。

高橋亜也

○おばあちゃん「病と闘いがんばる」と声振り絞り家族に告げた

（講評）体調がよくない祖母が、家族に心配かけまいという思いが伝わってくる。

杉山翔子

○食べた物忘れてしまう毎日がおはぎ出たこと笑顔で話す

（講評）食べたものをすぐに忘れてしまう利用者が、おやつのおはぎを食べたことを作者に何度も話した。

山崎友貴

○その人に合わせたケアを見つけ出し工夫を凝らす援助の現場

（講評）訪問介護事業所の実習で訪問介護員が、在宅でその人に合った援助方法を考えてケアしていた。

山本理貴

○いつだって助けにとんですぐ去る自立を守る私は黒衣

（講評）利用者ができることは任せて、できないことを実習生が手伝う。距離を置いた見守りの大切さを実感した作者であった。例えるなら、歌舞伎でいう黒衣である。

菊池悟司

○最終日老女に気持ち伝えたら「私も同じ」と涙流した

（講評）作者が「お別れですね」と言ったら、利用者が涙を流して別れを惜しんでくれた。

高橋美和

○何事も挑戦するのが大事だと話してくれたあなたに感謝

（講評）実習初日に利用者が、「若い頃はどんなことにも挑戦することが大事なんだよ。だから頑張ринаさい」と言ってくれた。利用者に、そっと背中を押してもらった気分であった。

丸山七彩

○「お願いよ迎えに来てと電話して」頼まれたのに立ち尽くすのみ

（講評）利用者が作者に電話番号を言い、「息子に私を迎えに来るように電話で伝えて」と頼んできた。どうしてよいか分からず、困ってしまった作者であった。

計良聡美

○最終日「頑張ринаよ」と励まされ手も握られて心潤う

（講評）作者が、「今日で実習が最終日なんですよ」と言うとき寂しそうな顔をした利用者。そして、「今しか勉強ができないんだから頑張るんだよ」と利用者が言ってくれた。そのことが、嬉しかった作者である。

横山麗菜

○ポンポンと肩をたたかれ振り向くと笑顔で手を振る利用者さん

（講評）作者と利用者が、互いに想い合い助け合った実習最後の別れの日。作者にとって、忘れられない瞬間の把握である。

坂井香菜美

○「月曜も来ればいいのに坂井さん」五日目に聞く嬉しい言葉

（講評）互いに思いあつた実習時最後の利用者の言葉。忘れられない良い瞬間の把握である。

櫻沢翠

○「梅雨まだか」待ちきれなくて折り紙し紫陽花作り感じる季節

（講評）作者が利用者と一緒に折り紙を折った。季節が動き始め、折り紙に感じる、ふとした感覚。

本間香澄

○はじめてのレクリエーション緊張で足が震える声がわななく

（講評）実習施設でレクをした時には本当に緊張して、声も足も震えてしまった作者。しかし、職員の助けや利用者の協力が無事に実習を終えることが出来た。

計良聡美

○風呂上り鏡見ながら髪とかす「可愛くいたい」と微笑む乙女

(講評) 高齢者施設の実習で利用者が整容している際、鏡を手渡すと、にこやかに作者にこう話し掛けてくれた。

## 2) 日常生活

坂井香菜美

○SNS相互フォローというけれどフォロー多すぎTLおえない

(講評) Twitterで「相互フォローをお願いします!」と言われるが、フォローが多すぎてTLがおえない。作者自身がフォローをあまりしたくないようだ。

西澤唯

○始まるよあなたが好きな土俵入り白鵬の番もうちょっとだよ

(講評) 白鳳の土俵入りが好きな作者が、利用者とよく一緒にテレビを観ていた。違う場所に作者がいるときにも、その利用者はすぐに知らせてくれた。

岡本悠華

○あら不思議貝柱ミソ大好きでご飯に乗ればアゴ下を向く

(講評) 食べこぼしが多い利用者が、夫が持参した貝柱味噌をご飯に乗せると、食べこぼしもなく自然に食べていた。

大口千穂美

○休日に家に帰ると懐かしい煮物や味噌汁かあさんの味

(講評) 作者が帰省するたびに快く迎えてくれる家族。帰れる場所がある喜びと、家族のありがたさが伝わってくる。

千原朱里

○休みの日予定がなくて暇すぎる一人が好きで独りが嫌い

(講評) 友達と距離を置いたり、たまたま「一人」でいるのはいいが、友達の集団から孤立する「独り」は嫌だという作者。

丸山七彩

○眼鏡からコンタクトに換え数週間それでも未だ「メガネ」と呼ばれ

(講評) 作者の「メガネ」というニックネームが定着しすぎて、呼び名がかわらない。しかし、そのような日常が楽しい作者である。

菅原那菜

○「餌をくれ」「散歩連れてけ」と家の亀通りがかれば私を見上げる

(講評) 作者が飼っている亀は、水槽に誰か近づくと歩み寄ってきて、訴えかけるように人を見上げる。



小林光

○四十肩いや五十肩「ああ痛い」そういう父は白髪が増えた

（講評）幼い頃から作者の傍にいてくれる父。作者が成長するとともに父親は年をとっていった。その当たり前のことを、介護を学んで気づいた。

大口千穂美

○地元から時々届くコシヒカリ透き間に野菜感謝が募る

（講評）親元から離れ一人暮らしをしている作者が、親への感謝の気持ちを素直に表現し得たよき歌。

成田莉菜

○ダイエットやると決めて「いざ実行！」三日坊主で「はい終了！」

（講評）決めたことを、どのように実行するかは本人次第である。ダイエットという一つの目標に努力を「しない」のか、力を尽くし実現「できない」のか。実直な人物像が浮かぶ。

弾正美沙貴

○「ばかうめえ」プリン一口食べて言う幸せそうなニコニコ笑顔

（講評）利用者のおやつにプディングがでた。そのカラメルソースを絡めたプディングが大好物であった。

横尾隼英

○毎日が忙しすぎて目が回るまだまだ慣れぬ短大生活

（講評）まだまだ、この学生生活に慣れることに時間がかかる作者である。しかし、そんな学生生活を楽しんでいる。

清水玲奈

○「おめでとう」不意打ちで来た父メール何だか自然と笑顔になれた

（講評）作者の誕生日の夜に急に来た父親からのメール。そのことがすごく嬉しかった。

## まとめ

時代の移り変わりとともに、私たちの生活は変化している。自然から離れ、都市で生活する人が増えた現代では、「自然詠」が減り、「都市詠」が増える傾向にある。また、超高齢社会を反映し、「介護詠」という分類名も耳にするようになった。

テーマとして例えば家族のことを歌うのは、毎日顔を合わせたりはしているだけに、かえって難しいところがある。それだけに当たり前のところに光をあてる工夫が必要であり、おもしろさと難しさがある。自分の詠んだ歌を人に読んでもらうということは、例えて言えば他人と会うのと同じことである。TPOと言うように、人に会うにはやはりそれらしい服装がある。ということで、言葉の選び方、並べ方、リズムの取り方などを吟味して、歌の姿を整えることを「推敲」という。わからない表現をわかりやすく、あいまいな言い方をくっきりと鮮明に、自分の心に一番ぴったりした表現に整えていく。さらに優れた短歌の作品を読むことによって、ものの見方を悟ることができる。つまり、作歌と並行して優れ

たものを読み、読んで得たものを作歌に実行するという努力を積み重ねて、物の状態を確実に言い当てた歌、輝きと響きとに満ちた歌ができるようになる。今後とも真の表現指導を目指し、実戦を重ねていきたい。

#### 参考文献

秋葉四郎 2013 短歌入門 実作ポイント助言. 飯塚書店.

秋葉四郎、馬場あき子編 2012 短歌入門. 角川学芸出版.

小島ゆかり 2002 短歌入門 今日よりは明日. 本阿弥書店.